

講演会開催報告

講演会「三島海雲、杉村楚人冠、そしてカルピス」

平成 31 年 4 月 20 日 生涯学習センター アビスタ ホール

以下は企画展「三島海雲と杉村楚人冠 ～カルピスと友情の物語」の関連企画として開催した講演会の要旨である。要旨は杉村楚人冠記念館で作成した。

第一部 講演 山川 徹 氏（ノンフィクションライター）

カルピスは国民飲料とよく言われるように、ほとんどの人が飲んだことがあり、100 年の歴史がある。それにもかかわらずこれを作った三島海雲^{みしまかいうん}という人のことはあまり知られていない。私の場合、カルピスというと小学生の時映画『火垂るの墓』^{ほた}を母親に連れられて見に行った思い出がある。清太と節子が砂浜に遊びに行く、そこでお母さんがカルピスも冷えてるから早くいらっしゃい、と二人を呼び寄せる。この頃からカルピスは飲まれていたんだと思った、その印象が強く残っている。大学を出たときにちょうど就職氷河期であり、仕事もなく将来もわからないので一年間海外に出た。そこでモンゴルを旅したので、モンゴルのことを調べているうちに、三島海雲がモンゴルを旅して、モンゴルの乳製品をヒントにカルピスを作ったことを知った。100 年以上も前にモンゴルを旅した三島海雲とはどういう人物なのか、いつか三島の足跡を追ってみたいという思いを持つようになった。

その後、ライターとして自然災害の取材を継続してやってきた。東日本大震災では三日後に宮城県に入り、あちこち歩いていた。そのとき、「浦霞」の佐浦の社長が給水タンクを持って水を配っている場面に出会い、既視感に襲われた。それが、三島海雲が関東大震災の時、被災者にカルピスを配り慰労した逸話だった。三島が大正時代にやっていたことを、平成の時代にもやっているんだ、このエピソードを話したところ、小学館の編集者が本（『カルピスを作った男 三島海雲』2018 年、小学館）の出版を引き受けてくれた。つまり、三島がやったことは古い話ではなく、現代の私たちが考えなければいけないことをたくさん残している、そのことを本に書いた。

今日は特に三島海雲とモンゴル、彼の青春の旅を紹介してみたい。三島は大阪箕面の浄土真宗の寺に生まれている。明治時代のはじめに日本にキリスト教が入ってくるなか、僧侶にも最新の知識が必要だということで、京都に西本願寺文学寮というエリート養成校が作られ三島もそこに入った。三島と杉村楚人冠^{すぎむら そじんかん}はそこで出会っている。三島は卒業後、山口県の学校で教師をやってから東京に出て仏教大学に入学した。そこで恩師の梅原融^{うめはらとむね}という人物が、北京で日本語学校を立ち上げる準備をしている文学寮の先輩のところへ行くことを勧めた。東文学社という学校で、日本語を基本に、物理や地理などを中国人の青年たちに教えた。日

露戦争が始まる直前である。三島も戦争と無関係ではいられなかった。三島が日華洋行という会社を作り日本製品の取引を始めるとちょうど戦争が始まり、軍馬の調達を依頼された。しかし、満州の取引などはすでに財閥が独占している。そこで三島は当時地図もなかったモンゴル高原へ渡った。戦争中から、モンゴルでは治安が悪くなり、軍馬の買い付けで知り合った王族や貴族の依頼で三島は武器を調達している。三島ほどモンゴル人と接触して信頼関係を築いた日本人はほかにいない。また、桑原隲蔵^{くわばらじつぞう}、矢野仁一^{やのじんいち}という東洋史学者を三島はモンゴルの遺跡へ案内している。同様に人類学者・考古学者の鳥居龍蔵^{とりいりゅうぞう}も三島と同行している。三島もモンゴルについて学術的な知識を身につけていったであろう。

三島はモンゴルの有力者とも密接な関係を築いた。ここで三島は彼らにもてなされ、初めて乳製品を食べる。のちに雑誌のインタビューで感想を、不老不死の霊薬に遭遇したよう、三日ばかりで便通がよくなり、不眠症も治ったと語っている。実は、彼は子どものころから病弱であった。今まで苦しんできた健康の不安を乳製品で解消できる実感をもてた、これがカルピスを作る原動力になったはずである。この直感は彼の先見性と健康に対する思いがもたらしたものだだろう。ただ実は、モンゴルでは彼の関心はまだ個人の健康にしかなく、次には羊の改良をして日本に輸出する事業を始めた。バックアップしたのは大隈重信であった。その後、清朝の崩壊で借りていた土地を追い出されることになり、いくつかのビジネスに手を着けるがうまくいかずに 1915 年に帰国することになった。

私も三島と旅した桑原の『考史遊記』をもとに、三島の足跡を追ってみた。まずは和田堀廟所の三島の顕彰碑のモデルになった居庸関^{きよようかん}である。側面には漢語、サンスクリット語、チベット語、モンゴル語、ウイグル語、さらに今ではなくなった西夏文字で旅の安全を祈願する経文が彫られている。これだけ様々な文化的背景を持つ人が行き来する場所で、三島もそういう異邦人、多様な人間の一人としてここを通ったのだということを実感する。

次に三島が乳製品と出会った内モンゴル自治区へシクテン旗である。三島を世話したジャンバルジャヴという貴族の研究をする歴史家と出会うことができた。彼が言うには、ヘシクテンは薬草、滋養のある草が生える地域で、乳製品も栄養豊富なものができる、このため当時はここから毎日乳製品を 800km 離れた北京の清朝の王族のもとへ運んでいたということである。どうやって乳製品を 800km も運ぶのか、と思うが、数キロ単位で馬を交換する駅を作り、一晩で運んだのだという。このような土地柄であるから、三島が訪れたのがヘシクテンだったことは重要なのではないかと、彼は語っていた。

三島が食べたのはどのような乳製品だったのか私も食べてみたいと、あちこちお願いして、スルドウバータルさん、ドルナーさんという夫婦のテントに一週間ほど生活させてもらった。昔ながらのやり方をしている遊牧民は少ないということで、彼らと出会うまでは大変だった。貨幣経済が浸透し、遊牧民をやめたり、観光客に見せるための遊牧民になったりと変化して

いるのである。毎朝の朝食で、五種類の乳製品がある。三島が初めて食べたのはこの中の一つであるジョウヒだと思われる。製造は簡単で、搾った牛乳をポリタンクに入れておくだけでできる。それをすくって粟と砂糖を入れて食べる。三島も粟と砂糖を入れたというから、これが最初に食べたものと確信した。ドルナーさんは馬や羊も含めれば、60種類ほどの乳製品が作れるだろうという。また、偶然夫婦の知り合いの結婚式に行かせてもらうことができた。乳製品は儀式にも密接にかかわっていて、昔からの正式なやり方は、牛乳に浸したくしで新婦の髪をとくものだったそうだ。また、子どもが2歳か3歳の時に初めて髪を切るが、このときの髪の毛はバターのようなもので固めて母親が持っておき、なくすと不幸があると信じられている。それほど人と家畜の付き合いは密なものであった。翌日、この新郎・新婦がテントにやってきた。これは血のつながらない親になったので挨拶に来たのだということだった。自然環境が厳しいモンゴルでは、人と人とのつながりが一番重要なのだとスルドウバートルさんは強調していた。結婚にあわせて三組目の両親になってもらい、父方、母方とあわせ、新郎・新婦は6人の親を持つのである。

そして、三島を世話したジャンバルジャヴのひ孫に会うことができた。実際に会った経験がないのに彼は三島のことに非常に詳しかった。なぜかと聞くと、祖父母や使用人から三島の話が聞かされて育ったからだという。ジャンバルジャヴ夫妻は、三島という人物は素晴らしかった、例えば、料理の仕方を聞いてすぐに再現して、不在の間に作っておいてくれた、というような話を一族に盛んにしていたのだそうだ。彼は、三島はモンゴル人に非常に愛されたはずだという。なぜかと聞くと、三島はモンゴル人っぽかったんじゃないかという。それはおそらく、チベット仏教の国であるモンゴルで、僧侶でもあり、仏教の高等教育も受けている三島は仏教徒として尊重されたからでもあろう。モンゴル人は先の結婚の話にもあったように、家族と人のネットワークを大切にするが、それと三島の座右の銘の一つ重々無尽という考え方が重なるのではないか。人間は神羅万象様々なものにつながって生きているから、そのすべてに感謝して生きなければならないという考え方である。自然と自分、動物と自分、家族と自分という関係性を大切にするモンゴル人の考え方と仏教を学んだ三島の考え方はつながったはずである。

三島の経営方針は国利民福というものだったことが知られている。企業は民を幸福にしてこそ存在意義がある、という考え方である。関東大震災の逸話もその反映と言えるし、みんなに健康になってもらいたい、という考えを徹底している。こういう考え方は今の社会に必要なのではないか。今、モンゴルを見ても日本を見ても格差が広がり、社会からこぼれ落ちていく人たちに対するまなざしが失われている気がする。三島はモンゴルの文化を尊重し、学び、日本に取り入れてみんなのために、国利民福を願う、ということをやっていた。カルピス100年を機にこういうことを考え直してみたいと思う。

第二部 対談 山川 徹 氏（ノンフィクションライター）

福田 正彦 氏（日本ミネラルウォーター協会技術顧問）

山川 福田さんは杉村楚人冠、三島海雲の両方に直接会われたことがあります。そもそものきっかけからお話いただけますか。

福田 戦争中、昭和 19 年に小石川区の大曲というところに住んでいたんですが、すぐ隣の紙器会社の建物を守るため、周辺住宅は強制疎開をすることになり、父が杉村楚人冠の息子さんと親しく、結婚の媒酌人もやっていたことで、楚人冠さんから我孫子に来ないかと言っていたので、移りました。

山川 楚人冠さんは気難しい人だったとお話しになっていたのが印象に残っていますが。

福田 楚人冠さんは我々から見ると変わった方で、庭の下生えを刈っちゃいかん、自然のままにせよとおっしゃったそうで、今はきれいな庭ですけど、当時は歩きにくい庭でした。そこをいつも杖をついて歩いておられました。私たちが住んでいた澤の家の横に観音像があって、それを見ながら庭に下りていく。そんな時私が出かけるので「おはようございます」とか「こんにちは」と言って横を通り過ぎるんですが、杖をついて上を向いて立ち止まっている楚人冠さんが「うん」とうなずいてくれる、こんな感じでした。

山川 その時、すでに楚人冠さんをご存じだったんですか。

福田 私の兄もよく本を読む人でしたので、『楚人冠全集』を買ってあって、私もそれを読んでいました。楚人冠の文章が好きで、私が文章のお手本にしようと思ったのは楚人冠さんと『よき時代のよき大学』などをお書きになった池田潔いけだ きよしさんです。

山川 そういう憧れの人だったんですね。三島さんとの出会いは、杉村さんとの関係で就職してからですか。

福田 そうですね、あの頃は大変就職難で、北海道の大学を出てフラフラしていたので、親父が見るに見かねて頼んだんだと思います。最初は大阪、次に東京の工場に勤めたら、今度はカルピスで初めて企画調査室というのができて、そこに行けと言われた。それからですね、お会いしたのは。

山川 楚人冠さんと三島さんの付き合いはどの位になるんですか。

司会 楚人冠が文学寮に赴任するのが 24 歳で、73 歳で亡くなるまでですから 50 年近くですね。

山川 気難しい楚人冠と、天真爛漫な三島さんは気が合ったんですかね。

福田 楚人冠さんとはそんなにお話しできたわけではなかったのですが、ただ『楚人冠全集』を読むと茶目っ気のある方ですね。面白い人生を過ごしたんだろうなと思わせる、そういう点が三島さんとよく似ています。

山川 実際にお会いになった三島海雲はどのような人物でしたか

福田 三島さんは、傍^{はた}から見ても我が道を行くという感じの人です。ただ、色々なことを後輩に教えたい、事業のこととかではなくて、生き様を教えたいという人でした。それから、とても一途な人で、三島さんがたまたま散歩しているときに、その近くに住んでいた私の後輩が森永乳業の牛乳をとっていたことに気づいた。カルピスの原料乳仕入先は明治乳業なんです。それで「すぐやめなさい」と変えさせた（笑）、そういうところがある人です。

司会 ここで、テーマを設定して三島さんの人物像をもう少し深めてみたいと思います。楚人冠の四男武^{たけし}さんが書いた話に三島さんの日光浴の話があります。三島海雲記念財団に残る手紙にその日光浴の道具を聞いているものがあり、楚人冠も真似しようとした気配があります。この日光浴をはじめとする健康へのこだわりについてお聞きしたいと思います。

福田 日光浴は有名な話で、裸になって天眼鏡でおへそのところを暖めるんですね。下手するとやけどするんですが、この間隔が大事なんだとか言いながらやるんです。三島さんは健康法に拘泥しているわけではなくて、健康でないとやりたいことがやれない、だからいろいろな健康法を試す、というところがありました。食べ物でもアワビの肝がいいというとならばばかり食べる。そして、その効果があるのかどうか、必ず当時の一流の学者に確認する、ということをしました。

山川 調べてみると、最初は天眼鏡を使わずごま油を塗って日光浴をしたみたいですね。明治の終わりから大正の、カルピス発売も含む健康ブームの中で三島さんも健康法を編み出した。ラジオ体操が始まるような時代でもあります。体が弱かった幼少期の経験が、そういう過酷な（笑）健康法にも向かわせたんでしょね。

福田 年を取るにつれて周りの友人が亡くなるとお寂しいでしょう、という、そんなことは、あいつらはちゃんと健康に気を使わないからああなるんだ、なんておっしゃっていました。

山川 おへそを焼くということだと、当時は腹は滋養の象徴だから、と説明する専門家の方もいらっしゃいましたね。自分の健康だけではなく、国民を、子どもたちを健康にするんだという信念はずっと持っていたみたいですね。

福田 それはあると思います。先ほどの大震災の話もそうですし、戦後南極観測が始まるときに真っ先にカルピスを寄付しろと言ったのも三島さんです。

山川 前の東京オリンピックのときに福田さんたちがカルピスを配ったとか…。

福田 「宣伝というのでなくて、おいしいんだから飲んでもらおう」と、こういうんです。私はだいたい選手村にカルピスを持っていきましたよ。選手村の通行証を今でも持っています。

山川 カルピス以外にも、ピータンを実用化しようとか、いろいろ考えたそうですね。

福田 本当に多種多様でしたね。ピータンは土に入れて作るのを薬品でできないかという話でした。

山川 粟を使った食品や、ローヤルゼリー…。ローヤルゼリーは今では当たり前ですが、1960年代には奇抜で新しいアイデアですよ。

福田 粟、ローヤルゼリー、ピータン、さらにガラナもやりましたね。南米産のガラナ飲料は実際に発売したけれども、それほどは売れなかったですね。

山川 福田さん自身が子どもの頃には、カルピスはどのような存在でしたか。

福田 貴重品でしたね。当時清涼飲料水というと三ツ矢サイダー、ラムネ…。カルピスは風邪をひいた時とか、お客さんが来た時しか、飲ませてくれないものでした。カルピス会社に入ってから、母親の友達にあげたら、あれは大事だからうんと薄めてお砂糖入れて飲んでるの、なんて言われました。

山川 僕より一回り上の世代の方から、カルピスは母親に作ってもらうもの、という話を聞いて驚いたこともあるんですが…。第一部でも話したように『火垂るの墓』では清太と節子がカルピスを飲むシーンがあるんですが、あの主人公のお父さんも海軍なので、裕福な家庭なんですね。

福田 言い方は悪いですが、中流以上でないと当時は飲めなかつたろうと思います。

山川 僕らの世代だと、コンビニもあるので多様な飲料の一つという感覚ですが、特別なものだったんですね。

福田 戦後カルピスに似た商品もいくつか出ていますが、結局カルピスが一番おいしくなった理由があるんです。カルピスは脱脂乳を乳酸発酵させて、さらに酵母発酵させます。二次発酵と我々は言ってます。今は公になっているから言えるんですが、昔はそこまで言えませんでした。発酵生成物が複雑になっておいしくなるんです。

山川 戦後の過当競争を生き残った要因は三島独特の発想から生まれた広告の数々だという話もあちこちで聞きますね。「初恋の味」であったり、福田さんが関わったオリンピックで世界中の人に飲んでもらおうという取り組みだったり。新しい発想があったんでしょうか。

福田 広告に関しては凄腕だった感じはしますね。東京オリンピックの翌年、1965年にパリで国際食品見本市にカルピスを出すことになり、私と研究室の2人で行きました。会場でカルピスを飲んでもらおうと、4倍では甘すぎるといふ。それならと作ってもらおうと6倍から7倍でちょうどいいといふ。糖と酸の比率の好みが違うんです。食生活が充実するほど糖酸比（注：糖酸比＝糖度÷酸度）は低くなると言われてます。インドネシアに行ったときに私が非常に酸味もあって甘くておいしいと思った果物を、向こうの人は全然食べない。なぜといふと酸っぱすぎるといふ。糖酸比でその国の食生活が分かるような気がします。

山川 そういえば、私もカルピスをモンゴルへ持っていったんですが、向こうの人たちは原液で飲もうとするんです。水で割らないとダメだと教えたんだけど、割ると薄いと。そのまま飲んで「いい酸味だ」といふんです。

司会 次の話題に行きます。三島海雲と楚人冠の共通点は仏教を大切にした、ということです。山川さんのお話しでも三島がモンゴルで馴染めた要因として仏教が挙げられました。まずは三島さんと仏教というキーワードでお話しをお願いします。

福田 私がいたころ、社長室には立派な仏像がありましたね。やはりお坊さんですから。これは仏教とは少し違うかもしれませんが、一番印象に残るのは天行健という言葉です（注：「天行健」は中国の『易経』の言葉）。天の運行というのはずっと変わらない、それと同じように我々も行動することが健康である、ということを書いて、例えば年齢によって「九十叟」などと書いて皆さんに配っていました。そういった思想をみんなに理解してもらいたいという気持ちはありました。それから、毎年富士登山をしていましたが、あれも宗教的な意味合いが強かったと思います。

山川 モンゴルを旅した時に法華経を読んでいたという話があります。先ほど紹介した鳥居龍蔵が書いた東蒙古、今の内モンゴルを旅するためのガイドブックがあるんですが、相当な荷物が必要とわかります。その中に、法華経を入れていったというのは三島さんが仏教をよりどころにしたことが伝わる話だと思います。モンゴルの人たちも敬虔な仏教徒です。その中に三島さんが入れた^{はい}というのは、必然のような気がします。あの時代だから三島さんは仏教の高等教育を受けたわけで、その影響もありますね。三島さんを北京に呼んだ^{なかしまさいし}中島裁之は欧州列強の侵略をうける中国の復興を教育から手助けしようとするんです。そのなかで文学寮をはじめとするネットワークが役に立って、三島さんが大陸に渡る。仏教の思想も三島さんのバックグラウンドですが、仏教のネットワークも彼のジャンピングボードになった、それがあって活躍できたと僕は考えています。

福田 社員に対して仏教のことを言うことはなかったですが、生き方のバックはそういうものがあるんですね。恵比寿に工場があった時代、人数が少ないですから、どこかへ行っていい野菜があると、何箱も持ってきて、みんな持って帰れ、とやるんです。自分がいいと思ったことは「施し」というか、みんなもそうしてほしいと考える人ですね。能面のレプリカを配ってくれたこともありますよ（笑）。

山川 他のOBの方から、トラック一台分スイカをもってきて、切って配るんじゃなくて一人に一個あげた話も聞きましたが…。

福田 当時私は独身寮にいたんですが、持って帰るのが大変でした。

山川 カルピスの社員がみんなスイカをもっているんで、恵比寿の駅員が驚いたという話が印象的でした。

福田 スイカに限らず、何度かそういう経験があります。

山川 自他一如という考え方が浄土真宗、あるいは仏教全体にあって、自分の喜びや苦しみを共有し合うことが大切だという考え方だそうですが、三島さんを見ていると自他の境をあ

まり作らない考え方の人だったのかと思います。

福田 そうですね、社長さんという感じはなかったですね。

山川 金をためるな、という話もありましたね。

福田 私も工場にいた頃の話です。総務部の次長さんが、これは社長からいただくボーナスですから、皆さん大切に貯金しなさい、と言った。そのあとに三島さんが来て「君たち、これは君たちが自分で獲得したボーナスだから、貯金なんてみみっちいことをしないで自分のために使いなさい」と演説したんです。僕らは一斉に喝采しました。

山川 三島さんも何度も本に書いていますが、金というのは必要になればどこかから出てくるものだ、というんですね。ちょっと浮世離れした感じはしますが（笑）。

福田 そのボーナスのときも、自分のために投資をしなさい、金というのはいつでも必要なときは出てくるもんだ、とこういつてましたね。

山川 僕はそういう浮世離れして経営者のじゃないところに魅力を感じますね。

福田 魅力でもある一方、組織としては問題があった、社内教育が遅れていて組織運営ができる後継者がいなかった。そこは、三島さんといえど欠点があるというところでした。

山川 自分の一人息子の克騰^{かつとう}さんを後継者にしないで、支援者の土倉^{どくら}家の息子に譲りますね。三島家でカルピスを継いでいく感覚はなかったんですね。

司会 今のやり取りで皆さんに知っていただきたいポイントが二つ出てきました。一つは三島さんは吃音^{きつおん}であったということで、先ほど福田さんがその話し方を真似してくださっていました。ところが、山川さんのご本では、三島さんは私がどもるからみんなは話をよく聞いてくれると、前向きにとらえていた話があります。

福田 三島さんは自分でどもると書いてましたけど、私が聞いた感じではどもっている感じはしませんでした。直接聞いた話では、話をしなきゃいけないときは、おれはどもるんで、上の階に行って何回も大きな声で練習したんだ、とおっしゃってました。最初の単語が出てこないの、最初の音を長引かせることである程度解決なさったようでした。ですから「きーみたちは」という感じになります。あの人は身振り手振りで話をするものですから、それで「きーみたちは……じーぶんたちのために」とやると、どもっている感じはしなかったですね。自分でも訓練されて、長い時間の間に独特の話法を獲得されたんだろうと思います。

山川 自伝では五歳くらいまでほぼしゃべれなかったと書いてますね。お母さんに付き合ってもらって、河原で発声練習をしたとか、お母さんがカタツムリの照り焼きが吃音の妙薬だという話を聞きつけてきて食べさせたとか、色々な逸話が出てきますね。

司会 先ほどのお話しの二つ目のポイントは息子に会社を継がせなかった話です。この二人の関係は山川さんの本の後半にでてきて、最後三島さんの今^{いま}際^わの際の言葉にハッとさせられる、という大事な要素です。ここは是非読んでいただきたいところです。楚人冠に送られた

手紙にも、息子をテストしてくれ、というものがあります。後年に至るまで三島さんが楚人冠を先生と慕った証でもあるのですが、三島さんと息子さんの関係についてお話しいただければ。

福田 克騰さんは一人息子で、私がお会いした時にはもう重役でした。とても人のいい方で、それが、海雲さんが社長の器でないと決められた原因でもあるのでしょうか、いつもニコニコしてみんなの言うことをよく聞いてくれる人でした。役員に商店の大番頭という感じの人が多くなかで、まとめていけないという感じも海雲さんにはあったのでしょうか。ただ、交友関係が非常に広い人でした。あるとき、海雲さんが日本酒のカクテルを作れ、と言ったことがあります。克騰さんが「おい、困ったな」と言いながら私のところに来ました。帝国ホテルの村上さんという有名な料理長を紹介するから行ってくれ、といわれて、私が村上さんのところに行ってカクテル・ジャパンというのを作りました。これは商品化まではいきませんが、何かあると克騰さんが、誰のところへ行け、誰の紹介状を書く、と指示をしていて、交友関係の広さは確かなものがありました。

山川 克騰さんの字はヘシクテン旗の漢字表記（注：克什克騰旗）ですね。海雲さんはそれを息子の名前につけるくらいこの旅の記憶を大事にしていた。彼は家族を置き去りにして旅をしていて、帰国後娘を若くして亡くしてしまった。だからこそ一人息子への愛は深いんですね。お孫さんの話を聞いても、海雲さんは克騰さんを愛していた。愛が深すぎるがゆえにうまくいかなかった、とおっしゃっていました。インタビューしていて克騰さんを悪く言う人はいなかったですね。お孫さんたちもお爺さんは嫌いだったけど、お父さんは大好きだったという。海雲さんは結婚に反対したりして、厳しかったみたいですね。

福田 お嬢さんもなかなか活発な方でしたから（笑）

山川 海雲さんは日露戦争に従軍はしなかったけれど大きく関わっている、克騰さんは太平洋戦争末期満州カルピスの社長で、終戦直後の満州でカルピスに青酸カリを入れて自殺したいという人たちに配る経験をしている。このエピソードは本に書けないかと思ったんですが、書かせていただきました。勝った戦争を体験した海雲さんと、負けた戦争を体験した克騰さんのギャップが二人の仲にひびを入れたと想像しているんですが。

福田 私は戦争を経験していますから、異常事態はその時そこにいる人間にとっては常態になってしまうというのがわかります。自殺する人にカルピスを配る、心を痛めながらもそうになったらそうするしかないと思うでしょうね。

山川 戦後はカルピスを平和の象徴という感じで売っていきますよね。ところが、そのなかで海雲さんが戦艦三笠を使った広告をやろうとして克騰さんと大喧嘩をする。その原因がそうした経験にあると思うんです。

福田 そういう意味でも、戦争というのは大きなひずみを生みますね。

司会 最後に山川さんにご本の取材を通して、三島海雲と杉村楚人冠の関係をどう感じていらっしゃるか、お話しただければと思います。

山川 三島海雲の人間的な魅力のなかに、みんな引き寄せられたり、仲間になっていったりするんですが、その最初の一人が楚人冠だったんじゃないかという気がします。楚人冠が三島を見出すエピソードは、遅刻した三島が外出禁止を楚人冠から言い渡されて、みんなが言い訳するところ彼は「はい」と言って引き下がったというものです。彼の素直さ、潔さが象徴的に表れていて、それがおよそ50年続く二人の関係と、三島さんの筋が一本通ったような生き方の振り出しにあたるんだろうなと思います。

司会 ありがとうございます。(終)



対談の様子 左 山川 徹 氏 右 福田 正彦氏